

Q

「えーと」「あの一」と言ってしまうのはなぜですか？

おしゃべりしているときや授業での発表のとき、私はよく「えーと」とか「あの一」とか言ってしまう、友達とか先生から冷やかされます。出そうと思っているわけでもないのにどうして言ってしまうのか、自分でも不思議です。

A

札幌学院大学人文学部教授

森 直久 (もり なおひさ)

とくに意味のないこのような発話を「有声休止」といいます。有声休止には二つの機能があるとされています。

一つは対人的機能です。おしゃべりしているとき、続く言葉や文がすぐ出てこないことがありますよね。サックス、シュゲロフとジェファソン (1974) が発見した「会話の順番取りシステム」という会話のルールによると、文末などの発話の区切りで黙ってしまうと（この現象を「無声休止」といいます）、他の人が話し出すきっかけをつくってしまい、まだ話したいあなたから発言権が移行する可能性が生じます。そうならないためには話し続ければよいのですが、すぐには考えがまとまらない。そこであなたは発言権を維持するために有声休止を発するのです。

もう一つは認知的機能です。有声休止には考えをまとめる補助的役割がある、というものです。授業での発表にみられる有声休止は、こちらでしょう。発表ではあなたひとりが話すことを許されていますから、黙っていても誰も口をはさまないと思います。したがって無声休止でも、つまり黙って考えていてもよいはずなのですが、なぜかたびたび有声休止が出てしまいます。ディアズとバーク (1992) には、課題の困難度の上昇と、無声から有声への休止の変化の相関関係が示されています。あなたは「えーと」と声に出さないと、うまく考えがまとまらない。それで有声休止を発しているというわけです。また、休止ではないのですが、やはり発話に登場するそれ自体意味のない添音（たとえば「僕がね」の「ね」）が認知的機能を有しているこ

とを、田中 (1983) の実験が鮮やかに示しています。有声休止や添音以外には、音読や線引き（難しい本を読んでいるときついやっていませんか）といった行動も認知的機能を有するとされ、それらは「外的補助」と総称されます。

外的補助は、「認知主義」(cognitivism) という、広く心理学で暗黙の前提となっている見解を揺るがす重要な現象です。思考が頭の中で完結していると考え、心と行動を分断し、後者は前者の添え物と解するのが、認知主義です。しかし外的補助という現象が教えてくれるのは、人間は話したり、行動したりしないと円滑に考えられないことがある、行動もまた思考の一部であるということではないでしょうか。

20年以上前の研究が教えてくれているのに、まだ認知主義を信じる人が多いなんて許せませんね。私、堪忍袋の緒が切れましたー！！

文 献

- Diaz, R. M. & Berk, L. E. (1992) *Private speech*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Sacks, H., Schegloff, E. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, 50, 696-735.
- 田中敏 (1983) 「小学生児童における発話の停滞現象に関する研究」『教育心理学研究』29, 306-313.



Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』（共著、北大路書房）など。